

～クリスマスメッセージ～

しゅ こ おな ふか やみ とお
主はわたしたちのところに來られた。同じ深い闇を通して

「布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子」、人間的に悲惨で貧しい状況の中で生まれたこの乳飲み子が救い主であるとはいったいだれが信じることができるでしょうか。しかし、貧しい羊飼いたちは布にくるまれたイエスを見てすぐ救い主と信じました。暗闇の中に置かれている自分たちのところに、神ご自身が同じ深い闇を通して來られたのだと。

今年もコロナ禍のために人々は接触を避けています。感染しないための距離は、紛争や貧しさのために家を追われた人たち、難民となった人たちに対する「無関心の距離」となってさらに広がり、彼らを覆う闇はますます深まってしまいました。しかし、その闇を通してイエスは駆けよってこられたのです。

飼葉桶の中で眠る乳飲み子イエスは私たちに向かって無言のうちに語っているようです。「私はここにいるから、どうか、この大切な人たちに光と希望をもたらしてほしい」と。

にほん なんみんいじゅういどうしゃいいんかい いいんちよう まつうらごろう
日本カトリック難民移住移動者委員会 委員長 松浦悟郎



クリスマス特集号



今号の内容

- スペイン語、ベトナム語、ポルトガル語、中国語、韓国語のクリスマスメッセージ p.2
- 真の入管法改正と難民保護法制定を求める取り組み p.4
- 手探りの「アフガニスタンプロジェクト」 大阪大司教区シナピスから p.6
- とともに歩む「わたしたち」になるために 札幌教区難民移住移動者委員会から p.7
- スペイン語話者司牧者の集い(APALA)、船員司牧部会、事務局からのお知らせ p.8





Feliz Navidad

P. Rafael Tadeo Mejia, MG

Hace más de dos años que iniciamos a luchar contra la pandemia del Corona Virus. Esta pandemia, la cual pensamos que acabaría pronto, ha cambiado la vida de todo el mundo. Por este virus, hemos perdido a miles de personas; familias se han visto afectadas en su economía; muchos hemos perdido la tranquilidad, la paz. Creo que, en estos momentos, todos estamos elevando los ojos al cielo, pidiendo a Dios que nos ayude a superar esta grande prueba que parece no tener fin.

En medio de esta pandemia y con todas las restricciones que esto implica, en la Iglesia hemos iniciado tiempo de Adviento que culminará con la celebración del Niño Jesús. Creo que hoy más que nunca debemos prepararnos para recibir en nuestras vidas al Emmanuel, Dios con nosotros. No cabe duda que la presencia del Niño Jesús en nuestras vidas, nuestras familias, nuestras comunidades es necesaria hoy más que nunca. Ya que donde Dios habita, aún en medio de las situaciones más difíciles de la vida, encontramos esperanza, amor, unión, consuelo y muchas fuerzas para seguir adelante. Así mismo, la presencia de Jesús disipa toda discordia, borra rencores y transforma a toda persona que se deja tocar por Él.

Deseo que en esta Navidad abramos nuestro corazón para recibir al Niño Jesús. Hagamos de nuestro corazón un pesebre donde El pueda habitar y nos pueda dar la paz que necesitamos en estos momentos. Así mismo, aprovechemos estos días de fiesta para estar con la familia agradeciendo a Dios por el Don de la Vida. Para orar también por todos aquellos que han fallecido a causa del corona virus.

Que la Luz del Niño Jesús, brille sobre cada uno de ustedes, sobre todos sus seres queridos y que cuando nos sintamos solos, cuando las cosas no salgan como deseamos, cuando tengamos problemas en la familia; cuando nos sintamos enfermos, estresados, desanimados, digamos con mucha fe. Maranatha! ¡Ven Señor Jesús! ¡Feliz Navidad y próspero Año Nuevo 2022!



“... không có chỗ cho ông bà trong quán trọ” (Lc 2,7b)

Lm Micaer Lập sdb

Giáng Sinh 2021 lại đến. Rất nhiều người trong chúng ta cần một nơi để “trợ”. “Trợ” ở đây có thể là một nơi để gối đầu, một nơi nương tựa tinh thần, hay vật chất, hoặc một tương quan chan chứa tình người v.v...

Thánh Luca tường thuật câu chuyện Lễ Giáng Sinh đầu tiên tại Belem, đôi bạn trẻ mới cưới không tìm được quán “trợ” để sinh con. Một câu chuyện buồn, nhưng mang lại tin vui cho nhân loại. Một thế giới không có nơi “trợ” cho đôi bạn trẻ nghèo là tin “buồn”, nhưng lại là tin “vui” vì “Con Trẻ” được sinh ra là “Đấng Cứu Thế”, đến để mang hạnh phúc cho nhân loại.



Theo Phúc âm Thánh Luca chương 2 câu 7b “... Bà đã sinh con đầu lòng, và lấy tã vấn con và đặt nằm trong máng cỏ, bởi vì không có chỗ cho ông bà trong quán trọ.” Tuy gia đình trẻ của Maria, Giuse và Giêsu nghèo, nhưng các Ngài đã tạo cho chúng ta một gia tài vô giá, một cơ hội để được thưởng thức hạnh phúc ở đời này và đời sau.

Giáng sinh 2021 và Năm mới 2022 về, kính chúc quý ông bà, anh chị và các bạn trẻ tìm được nơi “trợ” và cầu mong Gia Đình Thánh Gia sẽ là nơi trợ ấm nhất của quý vị.

“Chúng mình đã có chỗ “trợ”



Prezados amigos de língua portuguesa.

Ir. Rosina Maria Magldi

Creio que nesta festa do Natal estarão sentindo mais saudades da família e dos parentes porque nos nossos países celebramos juntos o nascimento de Jesus. Sentir saudades é normal, mas não podemos esquecer que embora estejamos longe estamos unidos no amor.

Desejo que neste Natal abramos nossos corações para que Jesus entre nele de uma maneira especial, fazendo nele Sua Morada. Com Jesus nossa vida se transforma; mesmo num ambiente de sofrimento por causa da pandemia, sentiremos paz, alegria, esperança e amor. Seremos capazes de compartilhar com os demais o que somos e o que temos; ao nosso redor haverá mais sensibilidade, acolhida, generosidade e solidariedade.

Desejo também que a partir deste Natal tenhamos disposição para dar valor e sentido a nossa vida cotidiana percebendo nela a Presença de Jesus. Feliz e Santo Natal para todos!



在黑暗中等待曙光

杨成源 · SVD

两千多年前，耶稣的诞生为黑暗中的民众带来了曙光，给迷茫者指明了方向，也让失望者燃起了希望之火。耶稣实践了先知的预言，也就是依撒意亚先知所预言的：“因为上主给我傅了油，派遣我向贫苦的人传报喜信，治疗破碎了的心灵，向俘虏宣告自由，释放狱中的囚徒，宣布上主恩慈的喜年，……，安慰一切忧苦的人。”（依 61：1-2）耶稣就是依撒意亚先知所预言的默西亚，人们等待已久的救世主。耶稣的到来给贫苦的人带来了喜讯，让那些处于社会边缘的人回归了社会。因为耶稣让瞎子复明，聋子听见，哑巴说话，瘸子行走，也让麻风病人洁净，改变了底层民众的生存状态。也给那些罪人留下了改过自新的机会，开辟了走向天国的道路。耶稣把天主的恩典临到这些被社会轻视，忽略，遗忘和抛弃的人身上，可以说耶稣让所有的人从黑暗走向了光明。现在蔓延了两年的疫情让世界很多人陷入了困境。教堂时有关闭，许多人的心灵变的干涸，需要精神食粮的滋养。许多工场倒闭，使大批工人失业，生活陷入了赤贫，需要物质的帮助。许多应该有的交流陷入中断，需要对话来解决彼此之间的矛盾。我们希望耶稣基督的诞生给世界带来希望之光，让疫情消失，让在恐惧与不安中生活的我们摆脱疫情的阴影，让社会的运转步入正常轨道，让陷入各种困苦中的民众重新站立起来。所以我们满怀希望之情，迎接耶稣基督降生在每个人的心中，也把这份喜悦之情分享给周边的人，让世界在天主爱的普照下和谐共处。



주님을 맞이하는 아이들

사이타마 교구 소카/카와구치 성당 주임 루가 강민주

아직도 안심할 수 없는 이 상황 속에서, 저희 성당에선 미루고 미루던 첫영성체 공부를 겨우 시작하였습니다. 그리고 그 아이들이 11 월말에 첫영성체 반을 졸업하게 되었습니다. 이제는 예수님을 맞이할 때가 된 것입니다. 많이 기다렸습니다. 우연히도 때마침 대림과 성탄 시기입니다. 처음 예수님을 만나는 마음. 이천년전 첫 크리스마스를 보낸 분들의 마음을 상상해 봅니다. 지금 성체를 영할 준비를 하고 있을 아이들의 기분과 많이 다르지 않았을지도 모르겠습니다. 첫영성체라는 예수님을 처음 맞이하는 기분을 우리도 알고 있습니다. 긴장은 되지만 설렘도 있는 무어라 형용할 수 없는 기쁨이 있었습니다. 동작 하나하나 세심히 살피며 배우고, 고해성사 후에 마음을 깨끗이 착하게 가지도록, 예수님이 오실 마음의 길을 갈고 닦았었다 생각합니다. 여러분도 올 대림 성탄은 첫영성체의 아이들과 같은 마음으로, 예전 첫영성체 때와 같은 기쁨으로 보내시기를 기도드립니다.

真の入管法改正と難民保護法制定を求める取り組み

～ウィシュマさんの事件をふまえて二度と同じ犠牲を繰り返さないために

2021 年の通常国会に提出された入管法改定政府案は、多くの市民の反対の声を受けていったん廃案となりました。カトリック教会でも、いのちと尊厳を軽んじる法案に反対の声をあげ、市民団体などと協働して取り組んだ「入管法改悪反対」署名には 10 万筆以上の声を集めることができました。

しかし今回の入管法改悪をいったん止めることができて、外国人への人権侵害や排除を生み出す現在の入管収容制度や難民認定制度は変わらず、現行の制度のもとで、多くのいのちが犠牲になっています。2021 年 3 月に名古屋入管で亡くなったスリランカ女性ウィシュマさんの事件は、いまだに真相究明がされていません。衆議院選挙が終わった現在、来年の通常国会に向けて、いったん廃案となった入管法改定案を政府が再提出するという動きが伝えられており、再度、反対の声を大きくしていかなければなりません。

J-CaRM ではウィシュマさんの死を生み出した現行の入管収容制度や難民認定制度を検証し、真の「法改正」の方向を考えていくため、7 月 31 日にはオンラインセミナー「真の入管法改正と難民保護法を求めて」を開催しました。このセミナーを皮切りに、来年の通常国会に向けた新たなキャンペーンを開始しています。10 月の全国担当者・ネットワーク合同会議や、11 月の正義と平和全国集会大阪大会の J-CaRM 担当の分科会でも、入管収容・難民保護制度のテーマについての問題提起を行いました。ここでは、7 月のセミナーでも取り上げられたウィシュマさんの死亡事件について 8 月 10 日に入管庁から出された「最終報告書」で改めて露呈した入管制度や外国人政策の問題についてお伝えしたいと思います。



※国会前写真(移住連提供)

入管庁が公表した「最終報告書」

入管庁は 8 月 10 日にウィシュマさんの事件の最終報告書を公表しました。しかしながら「報告書」は、死因について、「複数の要因が影響した可能性があり、具体的な経過の特定は困難」と結論づけ、入管庁の対応とウィシュマさんの死の因果関係を認めていません。有識者の意見をふまえたとしつつも入管庁がまとめた内部調査であり、入管の不透明な組織体質を体現したものでした。他方で、その不十分な報告書の記載からも、ウィシュマさんが入管収容施設内で虐待ともいえる非人間的な扱いを受けていた事実が明らかになりました。

DV 被害者からの保護を求めて入管施設に収容

「報告書」によれば、ウィシュマさんは 2020 年 8 月 19 日、同居している同国人パートナーからの DV からの保護を求めて静岡県内の交番に自ら出頭したことにより、オーバーステイで逮捕され、名古屋入管に送られました。その後、2021 年 3 月 6 日に亡くなるまでの間、入管収容施設に収容されていました。

交番では「恋人に家を追い出された」と説明し、入管収容施設に収容された後も入管職員に対し、恋人からの身体的暴力や中絶の強要などについて何度も説明をしていました。しかしながら、入管職員は内規である「DV 事案にかかわる措置要領」の手続きをふんで、ウィシュマさんを DV 被害者として認知することはありませんでした。DV 被害者として認知されていたならば、ウィシュマさんは早い段階で仮放免が認められ、体調悪化や死をふせげていた可能性が大きいにもかかわらず、報告書では、入管が DV 事案としての対応を行わなかったことが死につながったとの反省はほとんど見られません。

健康状況が悪化しても適切な医療を受けられず

ウィシュマさんの健康状態は 1 月には著しく悪化し、食事が食べられなくなり嘔吐を繰り返すようになっていきました。2 回の仮放免許可申請も、ついに許可されることなく亡くなりました。2 回目の仮放免を申請した時には、体重は収容直後から 20 キロ近く減少

し、食事や水分の摂取もままならなくなり、外部病院での点滴治療を求めても、治療を受けることができませんでした。「報告書」には、ウィシュマさんがバランスをくずしてベッドから落ちたあとも3時間近くそのまま放置していたことや、飲んだカフェオレを吹き出すと、職員が「鼻から牛乳や」と揶揄したとことも記載されています。亡くなる直前には、ウィシュマさんが問いかけに反応しなくなったにもかかわらず、脈が止まるまで職員が救急車を呼ぶこともありませんでした。さらに、仮放免許可をしなかった理由について、入管がウィシュマさんの詐病を疑ってそれほど重篤な疾患ではないと認識していたことや、不許可にして強く帰国を説得する必要があったとの理由を、報告書で自ら明らかにしているのです。

死亡事件を生み出した問題の本質にあるもの

「報告書」は、入管収容施設内の職員の意識や医療体制に問題があったことを認め、それらの点における改善策をあげています。しかしながら、職員の意識や、入管収容所における被収容者の処遇の問題は、問題のごく一部分にすぎません。より根本的な問題

背景として、国外退去命令が出された外国人への無期限収容という入管収容制度、在留資格をもたない外国人を排除・送還すべき対象とみなし、そのためには手段を選ばない政策方針や組織体質があることが明らかです。入管収容施設での死亡事件は今回が初めてではなく、1997年以降、少なくとも20名の被収容者の尊い命が入管収容施設の中で奪われました。最近の死亡事件の例では、長期収容に抗議してハンストを行っていたナイジェリア人男性の飢餓死(2019年)、長期収容を苦にしたインド人男性の自死(2018年)、などがあげられます。いずれの場合にも共通するのは、長期収容の中で心身ともに追い詰められていった被収容者たちが、心身の不調をかかえても、収容所の外に出ることも許されず、最低限必要な医療も受けられずに、収容所内で亡くなっていったという点なのです。

このような事件を二度と再び繰り返さないため、ウィシュマさんの事件の真相究明と現行の入管制度の全面的な見直し、さらには真の「法改正」を求める取り組みを、カトリック教会としても関連団体との連携の上、今後もますます強めていきたいと思っています。

山岸素子(J-CaRM 定例委員)



手探りの「アフガニスタンプロジェクト」

カトリック大阪大司教区社会活動センターシナピス 川本綾

今年8月、米軍のアフガニスタンからの撤退に伴い、タリバンが政権を握りました。退避するアメリカ軍用機に人々がぶら下がり、そのまま人が振り落とされていく衝撃的な映像が日本でも報道されたのは記憶に新しいかと思います。シナピスでは2000年以降、タリバンによる迫害から逃れてきたアフガン難民やその家族を支援してきました。アフガニスタン難民の救援活動にかかわってきたスタッフの携帯には、8月以降、現地に住む家族を助けてほしい、または現地の知り合いから、子どもだけでも助けてほしいという声が入り続けています。シナピスにつながる人はすべてがタリバンから迫害を受けてきたハザラ人で、タリバンの復権によりさらに命の危険が予測される人々です。しかし私たちはいち市民に過ぎず、悪意にしている政治家がいたり、特別な外交ルートを知っているわけでもありません。混乱状態にあるアフガニスタンからビザはおろかパスポートもないアフガニスタン人をどうしたら呼び寄せることができるの

でしょうか。アフガニスタン難民支援の経験があるスタッフの「初めからできないと断言してやらないのと、やってみてだめだったというのでは大違い、みんなどうする？」という呼びかけにより、手探りの「アフガニスタンプロジェクト」が始動しました。

出来ることを模索

アリさん親子



まず、カブールから「助けてほしい」という悲痛な訴えが届いたアリさん一家の救出に取り組みました。アリさんには思春期の女の子2人と小さな男の子の兄弟、そして生まれたばかりの赤ちゃんがいます。UNHCRや現地日本大使館、外務省と、考え得る限りの関連組織に電話をかけて何とか外務省の担当部署につながり、自衛隊機の「退避者リスト」に載せてもらうことができました。しかしアリさん一家に搭乗の順番は回らず、空港近くの自爆テロで一家が空港に近づくこともできないまま自衛隊機は飛び去ってしまいました。



2003年にスタッフがアフガニスタンを視察した際、アリさんが自宅に招き郷土料理でもてなしてくれた。写真左はアリさんの親戚のこどもたち。男の子も女の子も一緒に遊んでいた。

取り残されたアリさんからは、「夜になるとタリバンがやってきて子どもや女性を誘拐していく、特にハザラ人は夜も寝ないで家族を守っている」という悲痛なボイスメッセージが連日入りました。また、20年前にアフガニスタン難民として日本に渡りシナピスとも深いかかわりがあるYさん、Gさんからも、現地の家族を救出し、日本に呼びたいという叫びが届いてきました。パスポートをもっていた現地のYさんの家族はパキスタンへ、Gさんの家族はイランへかろうじ

て脱出できたものの、日本への渡航はかなわず、日本行きのビザの発給に一縷の望みを託して待ち続けています。誰にも正解が見えず、現地との連絡がいつ途切れるかわからないという状態のなかで、シナピスのスタッフも外務省や周辺国の大使館、入管などと昼夜を問わず連絡をとり合いながら3家族が日本に来る道を必死で探る毎日です。



空港に押し寄せる群衆
あちこちで起こる爆発と負傷する市民



政府への訴え、そして祈り

シナピスでは、ニュース誌やホームページを活用して、アフガニスタンからの難民を受け入れ、日本にいる在留資格の切れたアフガニスタン人の強制送還をやめることを求めるFAXやハガキを日本政府に送ることも呼び掛けました。また、オンラインで「アフガニスタンの人々への祈りを届け

る集い」を毎月第2木曜日の夜に開催し、犠牲になった人々を悼み、悲しみにくれる家族が少しでも希望を見出せるよう、宗教を超えてともに祈っています。ニュースで見るアフガニスタンの人々すべてにどのように手を差し伸べられるのかはわかりません。しかし、まずは私たちの隣りにいる人々の苦しみや悲しみによりそい、この人たちのためにできることがないかを考えています。

ともに歩む「わたしたち」になるために

カトリック札幌教区難民移住移動者委員会 西千津

支援のきっかけ

30年くらい前、札幌の歓楽街で自分と同じ年頃のフィリピン女性に出会った。稼いだお金のほとんどを母国の家族に送るという話を聞き、「なぜ？」という驚きが、在住外国人への関心の始まりだった。しかし、彼女たちの拘束された生活や家族が大変な話を聞いても何もできなかった。今のようにならぬ誰かがスマホを持って連絡が取れるような時代ではなく、どうしたらいいのだろうと模索していた時、フィリピン女性たちがカ英語ミサにきているという新聞記事が目にとまった。それが、私とカトリック教会の出会いだった。

大好きな瞬間

あれから30年。今、私はカトリック教会をベースとした支援の現場にいる。と言っても、完璧な支援者になったわけではない。喜びも怒りも哀しみも楽しみも人それぞれである。同じ状況にいたとしても、人それぞれ受け取り方が違えば不安も悩みも度合いが違う。こちらが良いと考えて動いても「あなたは何もしてくれない」と言われたこともある。何もできないまま、どこかへ行ってしまった人もいる。達成感よりも後悔の方が多かったかもしれない。それなのになぜ、今も関わるのか？「苦しんでいる人の中にキリストの姿を見る」と言えば、格好よく聞こえるかもしれないが、そこまでの境地にはもちろん達していないし、苦しんでいる人ばかりを探しているわけでもない。不安な面持ちでいた人が、日本の生活に慣れた頃、笑顔に変わる時がある。「じゃあ、またね」と言って別れる時の笑顔に出会えた時、もうこの人は大丈夫と思える。その時の安心感が私は好きなのである。

相談者の問題ではなく、日本社会の課題

相談者が来た時、実は、その問題の核心に本人は気が付いていないことが多い。仕事ができなくてお金がないと言ってきた人は、手を痛めていた。病院へは行ったのかと尋ねると、病院代は友達が払ってくれたから大丈夫だと言うが、その友達に頼まれた仕事に起きた事故で手を痛めた

と言う。お金がないという問題だけではないことがわかり、「さて、どうしよう？」となる。

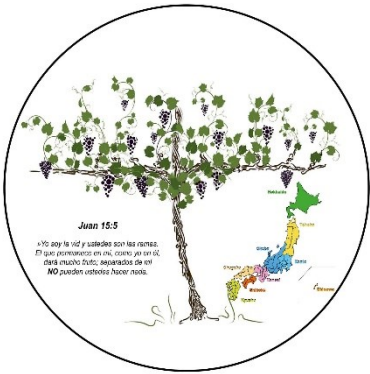
支援の現場は、いつもどんな相談が来るか予測はつかず、マニュアルもない。もちろん外国人の場合、在留資格など配慮すべきことはあるが、問題の核心を知るためには相談者に寄り添い、話を聞くことと、相談者が置かれている背景を具体的に理解することが求められる。これは、日本人も同じである。外国人に限らず、生きづらさを抱えた人に出会う度に感じるのは、日本社会の矛盾である。わたしたちが生きるこの日本社会の中にある矛盾だからこそ、わたしたちと一緒に考えるべき課題ではないかと思っている。とはいえ、相談者の希望どおりにしてあげたくてもできないことがたくさんある。そんな時はできないと言おう。投げ出すのではなく、できることを一緒に考えようでいいと思っている。

ともに歩む「わたしたち」になるために

誰かの話を聞き、「なぜ？」という疑問と驚きを解き明かすために自分の周りにいる人と一緒に考えてきた。語学が堪能でなくてもいい。それは通訳の人に任せよう。法律の専門家になる必要もない。それは、弁護士に任せよう。傷を治すのは医師や看護師に任せよう。会社との交渉は労働組合に任せよう。自分一人ではなかったから、そんな繰り返しをこの30年続けることができたような気がする。もちろん道が見えずに胃が痛くなるようなこともたくさんあったが、そんな時は、もう祈るしかないのである。教会の中で解決するには限度があるし、私がパーフェクトではないことを神様はご存じであると開き直ろう！

札幌教区の外国籍の信者数はそんなに多くはなく、小さな教会に一人、二人といることが多い。小さな教会のわたしたちに何ができるのかという問いをいただくことがある。シノドスへの歩みが始まった今だからこそ、「ともに歩む教会」について、「わたしたち」の中に教会に集う外国人も入れて、一緒に考えてみて欲しい。シノドスへの取り組みは、大きな機会をわたしたちに与えてくれている。

スペイン語話者司牧者の集い(APALA)



Apala Japon

APALA のブログについて、昨年クリスマスのニュースレター6 号でお知らせしました。日本の教会ニュース、スペイン語のミサ情報、日々のレクチオ・ディヴィナ(霊的読書)の手引きなど、スペイン語圏諸国をルーツに持つ信徒のみなさん向けの情報を発信しています。

Agentes de la Pastoral Latino - Iberoamericana - Japon blog

<https://agentesdelapastorallatina.blogspot.com/>

APALA では、今年2月からFacebook ページも立ち上げ、主日のスペイン語ミサ配信のほか、毎週金曜夜8時から信仰養成のためのプログラムを配信しています(Facebook で、「Apala Japon」と検索してください。どなたでもご覧いただけます)。全国各地だけでなく、帰国後も APALA のオンラインの信仰養成プログラムに参加している方もいます。お近くの、スペイン語話者のみなさんに、APALA のブログと Facebook ページを、ぜひお知らせください。来年3月には、スペイン語話者司牧者・コミュニティリーダーの全国大会を予定しています。

船員司牧(ステラマリス)の全国会議をオンラインで開催しました



新型コロナウイルス感染症は、船員やその家族たちに大きな影響を与えています。そして、日本の港で、船員たちの霊的ケアや支援のために船を訪問する船員司牧活動も、感染予防のため様々な制限を受ける中で、去る7月23日、全国会議がオンラインで開催されました。

第一部では「コロナ禍での体験を聴く」をテーマに、名古屋港と東京港での船員インタビュー映像や、船員司牧活動をどのように小教区とつなぐか、また手編みの帽子を編んで船員たちに送る活動が分かち合われました。第二部では、昨年100周年を迎えた船員司牧の歴史と、コロナ禍での東アジア・東南アジア地域の取り組みについての共有があり、各港や教区を越えて全国で今後取り組む活動について意見交換が行われました。船員司牧(ステラマリス)の全国研修会は、来年7月18日(月)海の日(祝日)に、オンラインで予定しています。参加方法など詳細は、「船員の日」のご案内とともにお知らせします。

日本カトリック難民移住移動者委員会 (J-CaRM) は

1960年代より「移住協議会」から「国際協力委員会」として活動を続けてきた組織ですが、1970年、バチカンにて聖パウロ六世教皇が「移住・移動者司牧評議会」を設立されたことを受け、2001年に日本の司教総会において現在の「難民移住移動者委員会」に改称しました。福音に基づき、多民族・多文化・多国籍共生社会をめざし、すべての人が神の子として、平等で基本的人権が尊重され、相互の文化・民族性を尊敬し、ともに兄弟・姉妹として生きることが出来る社会の実現を目的に活動しています。

日本カトリック難民移住移動者委員会の活動にご協力ください。

郵便振替：00110-8-560351

加入者名：日本カトリック難民移住移動者委員会

* 送金手数料無料の払込用紙をご希望の方は、難民移住移動者委員会事務局までご連絡ください *

電話：03-5632-4441 FAX:03-5632-7920

URL: <https://www.jcarm.com> E-mail: jcarm@cbcj.catholic.jp



日本カトリック難民移住移動者委員会 135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10
Catholic Commission of Japan for Migrants, Refugees and people on the Move